

がん患者の“第三の居場所”への提言  
—「元ちゃんハウス」のケーススタディー—

菊地 花

二人に一人ががんに罹ると言われる近年の日本では、がん医療の進歩に伴い、がんと闘い向き合いながら生活していかなければいけない期間が長くなってきている。しかし、本来共に進歩すべきがん医療とがん患者や家族の生活課題に対する支援は切り離され、がんと向き合う上で生じる様々な不安や葛藤を抱えているために生きづらさを感じている人が少なくない。

本研究では、がん患者や家族に対する、がんと向き合いながら生活していくための支援は不足しているのではないかという問題意識のもとに、近年の日本のがんの現状を整理したうえで、長期的にがんと向き合っていかなければならないがん患者や家族を精神面から支える存在として専門職とピアの両者を挙げ、それぞれに出来ることを確認した。また、がん患者や家族を支えるために必要な居場所について、文献も参考にしながら必要な要件等を記した。

そして、現在がん患者や家族の居場所としての役割を果たしている、石川県金沢市にある「元ちゃんハウス」を事例として取り上げ、筆者が実際に聞き取り調査を行って分かった設立の経緯や活動内容、今後の課題について整理した。

文献や聞き取り調査から、元ちゃんハウスががん患者や家族の居場所として機能するために必要な要素は何かを考察し、居場所を作る上での条件を次の項目にまとめた。

- (1) 生きる源である居場所と役割を創出する。
- (2) “当事者意識”でひとを巻き込み、一緒に動く。
- (3) 「らしさ」を出す。
- (4) 「頼れる場所を知っている」社会をめざす。
- (5) 潜在的ニーズを絡めとるパイロット事業として運営する。

さらに、聞き取り調査で分かった今後の課題をふまえ、元ちゃんハウスに対し以下の3つの提言を行った。

- (1) がん患者の居場所には、医療ソーシャルワーカーのような窓口あるいはつなぎ役としての職種を配置する。
- (2) がん患者の居場所を、医療者も訪れる場にする。
- (3) “お客さん”から“担い手”になれる居場所にする。

本研究が、調査にご協力いただいた元ちゃんハウスを運営する「がんとむきあう会」の皆様をはじめ、今後居場所を作ろうとしている方にとって少しでも参考になることを願う。